

# 赦罪の晩課

第 8 調

注意 譜面中、五線譜上に ||o|| とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈禱文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないよう、気をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。

司祭) われら かみ つね あが ほ いま いつ よよ  
我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、

誦經) われら かみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き  
アミン。我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

てん おうなぐさ もの しんじつ しん あ とくところ もの み とくところ もの ばんぜん  
天の王 慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、満たざる所なき者よ、萬善  
ほうぞう もの せいめい たも しゅ きた われら うち お われら もろもろ けがれ  
の寶藏なる者、生命を賜うの主よ、來りて我等の中に居り、我等を諸の穢より  
いさぎよ しぜんしゃ われら たましい すく たま  
潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救い給え。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち  
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を

ゆる せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ  
赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ  
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。アミン。

てん いま われら ちち ねがわく なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん  
天に在す我等の父よ、願は爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天

おこな ごと ち おこな わ にちよう かに こんにちわれら あた たま われら  
に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に

おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いぎない みちび なおわれ  
債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我

ら きょうあく すく たま  
等を凶惡より救い給え。

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋國と権能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。

誦經) きた われら おう かみ こうはい  
アミン。來れ、我等の王・神に叩拜せん。

きた われら おう かみ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王・神に叩拜俯伏せん。

きた われら おう かみ まえ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

## 【 第103聖詠 】

わ たましい しゅ ほ あ しゅわ かみ なんぢ いた おおい なんぢ こうえい いげん  
我が靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、爾は光榮と威嚴  
こうむ なんぢ ひかり ころも ごと き てん まく ごと は みづ うえ なんぢ みや  
とを被れり。爾は光を袍の如くに衣、天を幔の如くに張る、水の上に爾の宮を

た くも なんぢ くるま な かぜ つばさ い なんぢ かぜ もつ なんぢ ししや な ほのお  
 建て、雲を爾の車と爲し、風の翼にて行く。爾は風を以て爾の使者と爲し、焰  
 もつ なんぢ えきしや な なんぢ ち かた もとい た こ よよ うご なんぢ  
 を以て爾の役者と爲す。爾は地を固き基に建てたり、此れ世に動かざらん。爾は  
 ふち もつ いふく ごと これ おお やま いただき みづた なんぢ おどし よ こ はし  
 淵を以て衣服の如くに之を覆えり、山の嶺に水立つ。爾の恐嚇に依りて此れは奔り、  
 なんぢ いかづち こえ よ すみやか さ やま のぼ たに くだ なんぢ こ ため さだ  
 爾の雷の聲に由りて速に去る。山に升起、澗に降り、爾の此れが爲に定めし  
 ところ いた なんぢさかい た これ こ かえ ち おお なんぢ いづみ たに  
 處に至る。爾界を立てて之を躐えざらしむ、反りて地を覆わざらん。爾は泉を澗  
 つかわ やま あいだ みづ なが の もろもろ けもの の の うさぎうま そのかわき とど  
 に遣せり、山の間には水は流れ、野の諸の獣に飲ましむ、野の驢は其渴を止  
 む。空の鳥は其傍に棲み、枝の間より聲を出す。爾は上なる宮より山を潤し、  
 ち なんぢ わざ み あ た なんぢ くさ けもの ため しょう やさい ひと もとめ  
 地は爾の造工の果にて鑿き足れり。爾は草を獣の爲に生ぜしめ、野菜を人の需の  
 ため しょう ち しょくもつ いた さけ ひと こころ たのし あぶら そのおもて  
 爲に生ぜしめて、地より食物を出さしむ。酒は人の心を樂ませ、膏は其面を  
 うるお パン ひと こころ やしな しゅ き そのう はくこうぼく あ た とり  
 澤し、餅は人の心を養う。主の樹、其植えたるリバンの栢香木は鑿き足れり、鳥は  
 そのうえ す つく まつ つる すみか たか やま しか ため いわお うさぎ ため かくれが  
 其上に巢を造る、松は鶴の棲處たり、高き山は鹿の爲、磐石は兎の爲に避所たり。  
 しゅ つき つく ととき さだめ ひ そのい ところ し なんぢくらやみ し すなわちよ その  
 主は月を造りて時を定め、日は其入る處を知る。爾暗を布けば、則夜あり、其  
 ときはやし けものみない めぐ しし えもの ため ほ そのしょく かみ こ ひい かれら  
 時林の獣皆出で廻る、獅は獲物の爲に吼えて、其食を神に乞う。日出づれば、彼等  
 あつま おのれ あな ふ ひと そのわざ たため い はたら くれ いた しゅ なんぢ しわざ  
 集りて己の穴に伏す。人は其工作の爲に出で、勞きて暮に至る。主よ、爾の工業  
 なん おお みなちえ もつ つく ち なんぢ ぞうぶつ み か おおい ひろ うみ  
 は何ぞ多き、皆智慧を以て作れり、地は爾の造物にて満ちたり。夫の大にして廣き海、  
 かしこ むすう どうぶつ だいしょう いきもの かしこ ふねかよ かしこ か たいぎよ なんぢ  
 彼處には無数の動物、大小の生物あり、彼處には舟通い、彼處には彼の大魚あり、爾  
 つく そのうち あそ かれら みななんぢ ととき したが しょく あた ま これ あた  
 造りて其中に遊ばしむ。彼等は皆爾が時に随いて食を予うるを待つ。之に予うれ  
 う なんぢ て ひら たまもの あ なんぢ かんばせ かく おそ まど そのき と あ  
 ば受け、爾の手を開けば賜に鑿かさる、爾の顔を隠せば惶れ惑い、其氣を取り上  
 ぐれば死して塵に歸る。爾の氣を施せば造られ、爾は又地の面を新にす。願く  
 こうえい よよ しゅ あ ねがわ しゅ おのれ わざ たため たのし かれち み ちふる  
 は光榮は世に主に在らん、願くは主は己の造工の爲に樂まん。彼地を觀れば、地震  
 やま ふ けむりた われい うちしゅ うた よ おわ わ かみ うた ねがわ  
 い、山に觸るれば、煙起つ。我生ける中主に歌い、世を終るまで我が神に歌わん。願  
 わ うた かれ よろこ われしゅ たため たのし ねがわ ざいにんら ち き ふほう  
 くは我が歌は彼に悦ばれん、我主の爲に樂まん。願くは罪人等は地より消え、不法  
 もの そんな わ たましい しゅ ほ あ  
 の者は存するなけん。我が靈よ、主を讃め揚げよ。  
 こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。



司祭) <sup>こ まち およそ まち ちほう ため およ しん もつ こ うち お もの ため しゅ いの</sup>  
此の都邑と 凡 の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



司祭) <sup>きこうじゅんわ ごこくほうじょう てんかたいへい ため しゅ いの</sup>  
氣候 順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



司祭) <sup>こうかい もの りょこう もの やまい うれ もの かんなん あ もの とりこ もの およ</sup>  
航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び  
<sup>かれら すくい ため しゅ いの</sup>  
彼等の救の爲に主に禱らん、



司祭) <sup>われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬが ため しゅ いの</sup>  
我等 諸 の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



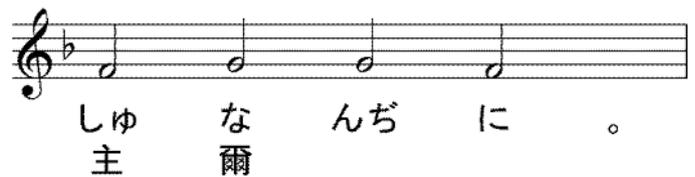
司祭) <sup>かみ なんぢ おんちやう もつ われら たす すく あわれ まも</sup>  
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



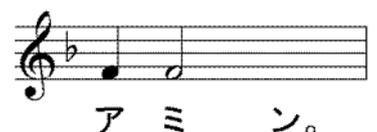
司祭) <sup>しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ</sup>  
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

<sup>しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら</sup>  
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

<sup>いのち もつ かみ いたく</sup>  
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) <sup>けだし およ こうえいそんきふくはい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup>  
蓋、凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



【 第140聖詠 (主よ爾に籲ぶ) 第8調 】

しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給  
主 爾 呼 速 我 格 給

またあえ、しゅよわれにききたまたあえ。  
主 我 聽 給

しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給  
主 爾 呼 速 我 格

またあえ、なんぢによぶときわがいのりの  
主 爾 呼 時 我 禱

こえをいれたまたえ、しゅよわれにききた給  
主 我 聽 給

またあえ、ねがわくはわがいのり  
願 我 禱

はこうろのかおりのごとおくなんぢが  
香 爐 か 香 如 爾

かんばせのまえにのぼおり、わがてを  
顔 前 登 我 手

あぐるはくれのまつりのごとくいられん  
擧 暮 祭 如 納

しゅよわれにききたまたあえ。  
主 我 聽 給

誦經) しゅ わくち まもり お わくちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま ことば かたぶ  
主よ、我が口に 衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給え、我が心に 邪なる言に傾  
きて、不法を行 う人と共に、罪の推 誘せしむる母れ、願わくは我は彼等の甘味を嘗め  
ざらん。義人は我を罰すべし、是れ 矜 恤 なり、我を譴むべし、是れ極と 美 しき 膏、我

こうべ なや あた もの ただわ いのり かれら あくじ てき かれら しゅちよう いわお  
が首を悩ます能わざる者なり、唯我が禱は彼等の悪事に敵す。彼等の首長は巖石  
あいだ さん わ ことば にゆうわ き われら つち ごと き くだ わ ほね ちごく ぐち  
の間に散じ、我が言の柔和なるを聴く。我等を土の如く斫り碎き、我が骨は地獄の口  
ち お しゅ しゅ ただわ め なんぢ あお われなんぢ たの わ たましい しりぞ  
に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は爾を仰ぎ、我爾を恃む、我が霊を退くる  
なか わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも たま ふけんしゃ おのれ あみ かか  
母れ。我が爲に設けられし弥、不法者の網より我を護り給え。不虔者は己の網に罹  
ただわれ す え  
り、唯我は過ぐるを得ん。

## 【 第141 聖詠 】

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい  
我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂を  
そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち おい  
其前に顯せり。我が霊の衷に弱りし時、爾は私の途を知れり、我が行く路に於て、  
かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと もの われ  
彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我  
のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ い なんぢ われ  
に遁るる所なく、我が霊を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて云えり、爾は私の  
かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま われはなはだよわ  
避所なり、生ける者の地に於いて私の分なり。我が呼ぶを聴き給え、我甚弱りたれば  
われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ  
なり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強ければなり。

## 【 スティヒラ 讚頌 】

しゅ われふか ところ なんぢ よ しゅ わ こえ き たま  
主よ、我深き處より爾に籲ぶ。主よ、我が聲を聴き給え、  
しよてんし た なんぢおうおよ しゅさい かしょう ただわれ なんぢ まえ ふふく ぜいり ごと  
諸天使は絶えず爾王及び主宰を歌頌す、惟我は爾の前に俯伏して、税吏の如く  
よ かみ われ きよ われ あわれ たま  
呼ぶ、神よ、我を潔め、我を憐み給え。  
ねが なんぢ みみ わ いのり こえ き い  
願わくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。  
ふし わ たましい どせい なみ おお なか すなわちた なんぢ おんしゅ よ かみ  
不死なる我が霊よ、度生の浪に覆わるる勿れ、乃起ちて爾の恩主に呼べ、神よ、  
われ きよ われ すく たま  
我を浄め、我を救い給え。  
しゅ も なんぢふほう ただ だれ よ た  
主よ、若し爾不法を糺さば、孰か能く立たん。  
われおこな あく おお おもい うち い またか おそ きつもん おも とき おそ おの  
我行いたる悪の多きを思念の中に入れ、又彼の畏るべき詰問を懐う時、恐れ戦き  
なんぢじんあい かみ はし つ いの ひとりつみ しゅ われ す なか おわり さき わ  
て爾仁愛なる神に趨り附きて祈る、獨罪なき主よ、我を遣つる母れ、終の先に我  
ひび たましい しょうかん たま われ すく たま  
が卑微なる霊に傷感を賜いて、我を救い給え。  
しか なんぢ ゆるし ひと なんぢ まえ つつ ため  
然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬しまん爲なり。

かみ むかし つみ おんな お ごと われ なみだ あた まよい みち われ さ  
 神よ、昔の罪ある婦に於けるが如く、我に涙を與えて、迷の途より我を去らし  
 なんぢ あし うるお つうかい もつ きよ いのち においあぶら なんぢ たてまつ え  
 めたる爾の足を濡し、痛悔を以て潔めたる生命を香膏として爾に奉るを得  
 たま われ なんぢ した こえ なんぢ しん なんぢ すく あんぜん ゆ い き  
 しめ給え、我も爾の慕うべき聲、爾の信は爾を救えり、安然として往けと云うを聞  
 ため  
 かん爲なり。

われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの  
 我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

われらみなつと せつせい もつ にくたい せい いさぎよ ものいみ しんせい みち ゆ きとう  
 我等皆務めて節制を以て肉體を制し、潔き齋の神聖なる途を行きて、祈禱と  
 なみだ もつ われら すく しゅ たづ あく まった わす よ おう われら  
 涙とを以て我等を救う主を尋ね、悪を全く忘れて呼ばん、ハリストス王よ、我等は  
 なんぢ まえ つみ おか むかし じん ごと われら すく たま じれん しゅ われら  
 爾の前に罪を犯せり、昔のニネヴィヤ人の如く我等を救い給え、慈憐の主よ、我等  
 てん くに あづか もの な たま  
 を天の國に與る者と爲し給え。

わ たましいしゅ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ  
 我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

しゅ われ およそ くるしみ あた わ おこない おも のぞみ うしな けだしみ われなんぢ  
 主よ、我は凡の苦に當る吾が行を思いて望を失う、蓋視よ、我爾の  
 とうと いましめ す ほうとう わ いのち ついや ゆえ いの きゆうせいしゅ つうかい なみだ  
 尊き戒を棄てて、放蕩に我が生命を費せり。故に祈る、救世主よ、痛悔の涙  
 われ きよ ひとりじんじ しゅ ものいみ きとう もつ われ てら たま しじん  
 にて我を潔め、獨仁慈なる主として、齋と祈禱とを以て我を照し給え、至仁なる  
 しゅうじん おんしゅ われ い なか  
 衆人の恩主よ、我を忌む勿れ。

ねが しゅ たの けだしあわれみ しゅ おおい あがない かれ かれ  
 願わくはイスライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼  
 そのことごと ふほう あがな  
 はイスライリを其悉くの不法より贖わん。

われら よろこ ものいみ とき はじ ぞくしん きんろう おのれ ゆだ たましい きよ からだ  
 我等は欣ばしく齋の時を始め、属神の勤勞に己を委ねて、靈を淨め、體  
 いさぎよ しょく お ごと およそ よく ものいみ ぞくしん しょとく たの みなねつ  
 を潔くし、食に於けるが如く凡の慾を齋して、属神の諸徳を楽しまん、皆熱  
 せつ これ すす かみ しそん くるしみおよ せい しん もつ よろこ み  
 切に之に進みて、ハリストス神の至尊なる苦及び聖なるパスハを神を以て喜びて見  
 え ため  
 るを得ん爲なり。

こう え い は ち ち と こ と せい しんにきす、いまも  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今  
 い つ も よ お よ に、ア ミ ン。  
 何 時 世 お 世

われぞうぶつはつねにぞうぶつしゅをうれいし  
我 造 物 常 造 物 主 憂

めていからあす、しょうぢよよ、われにつ  
怒 少 女 我 痛

うかいをあたえてわれをあらたあめ、  
悔い 與 我 改

なんちのたすけをもおつて、かみを  
爾 助 以 神

よろこばしむるおこないにみちびきた給  
悦 行 導 給

まあえ、わがしゃざいとすくいとをえん  
我 赦 罪 救 得

ためなあり。  
爲

【 聖入 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、<sup>つつし</sup> 肅 <sup>た</sup> みて立て、

せいにしてふくたるじょうせいなるてんのちちの  
聖 福 常 生 天 父

せいなるこうえいのおだやかなるひかりイイ  
聖 光 榮 穩 光

ススハリスト スよ、われらひのいりにいたりく  
我 等 日 入 至 暮

れのひかりをみて、かみちちとことせいしん  
 光 見 神 父 子 聖 神  
 をうと おう。いのちをたもうかみのこ  
 歌 生 命 賜 神 子  
 よ、なんぢはいつもけいけんのこえにてうたわ  
 爾 何 時 敬 虔 聲 歌  
 るべし、ゆえにせかいはなんぢをあがめ  
 故 世 界 爾 崇  
 ほむ。  
 讚

だいプロキメン  
【 大提綱 】

司祭) <sup>つつし</sup>謹 <sup>き</sup>みて <sup>べ</sup>聴く可し、<sup>しゅうじん</sup>衆 <sup>へいあん</sup>人に平安、

なんぢのしんにも。  
 爾 神

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) <sup>だい</sup>大 <sup>なんぢ</sup>ポロキメン、<sup>かんばせ</sup>爾の <sup>なんぢ</sup>顔を <sup>ぼく</sup>爾の <sup>かく</sup>僕に <sup>なか</sup>匿す <sup>われかな</sup>勿れ、<sup>すみやか</sup>我 <sup>われ</sup>哀しめばなり、<sup>き</sup>速に <sup>き</sup>我に <sup>き</sup>聴き

<sup>たま</sup>給え、<sup>わ</sup>我が <sup>たましい</sup>靈 <sup>ちか</sup>に <sup>これ</sup>近づきて <sup>たす</sup>之を <sup>たす</sup>援けよ、

なんぢの <sup>かんばせ</sup>顔を <sup>なんぢ</sup>爾の <sup>ぼく</sup>僕 <sup>かく</sup>に <sup>なか</sup>匿 <sup>す</sup>勿  
 爾 顔 爾 僕 匿 勿  
 れ、<sup>われ</sup>我 <sup>かな</sup>哀 <sup>しめ</sup>ば <sup>なり</sup>、<sup>すみ</sup>速 <sup>やか</sup>に  
 我 哀 速  
<sup>われ</sup>我 <sup>き</sup>に <sup>き</sup>聴 <sup>たま</sup>給 <sup>え</sup>、<sup>われ</sup>我 <sup>たましい</sup>靈 <sup>ちか</sup>に <sup>これ</sup>近づ <sup>たす</sup>きて <sup>たす</sup>之 <sup>たす</sup>を <sup>たす</sup>援 <sup>け</sup>よ、  
 我 聴 給 我 靈 近

づきてこれをたあすけよ。  
之 援

誦經) <sup>かみ</sup>神よ、<sup>ねが</sup>願わくは<sup>なんぢ</sup>爾の<sup>たすけ</sup>助は<sup>われ</sup>我を<sup>おこ</sup>起さん、

なんぢの かんばせ を なんぢの ぼくにかくすなか  
爾 顔 爾 僕 匿 勿  
れ、われかなしめばなり、すみやかに  
我 哀 速  
われにききたまえ、わがたましいにちか  
我 聴 給 我 靈 近  
づきてこれをたあすけよ。  
之 援

誦經) <sup>くる</sup>苦しむ者は<sup>もの</sup>之を<sup>これ</sup>見て<sup>み</sup>悦<sup>よるこ</sup>ばん、

なんぢの かんばせ を なんぢの ぼくにかくすなか  
爾 顔 爾 僕 匿 勿  
れ、われかなしめばなり、すみやかに  
我 哀 速  
われにききたまえ、わがたましいにちか  
我 聴 給 我 靈 近  
づきてこれをたあすけよ。  
之 援

誦經) <sup>かみ</sup>神を<sup>たづ</sup>尋ぬる者よ、<sup>もの</sup>爾等<sup>なんぢら</sup>の<sup>こころ</sup>心は<sup>い</sup>活きん、

なんぢの かんばせ を なんぢの ぼく にかくす なか  
 爾 顔 爾 僕 匿 勿  
 れ、われ かなしめば なり、すみやかに  
 我 哀 速  
 われに ききたま え、わが たましいに ちか  
 我 聴 給 我 靈 近  
 づきて これを たあす けよ。  
 之 援

誦經) <sup>なんぢ かんばせ なんぢ ぼく かく なか われかな</sup> 爾の顔を爾の僕に匿す勿れ、我哀しめばなり、

なんぢの かんばせ を なんぢの ぼく にかくす なか  
 爾 顔 爾 僕 匿 勿  
 れ、われ かなしめば なり、すみやかに  
 我 哀 速  
 われに ききたま え、わが たましいに ちか  
 我 聴 給 我 靈 近  
 づきて これを たあす けよ。  
 之 援

誦經) <sup>しゅ われら まも つみ こ くれ わた たま しゅわ せんそ しみ なんぢ あが ほ</sup> 主よ、我等を守り罪なくして此の晩を度らせ給え、主吾が先祖の神よ、爾は崇め讃

<sup>なんぢ な よよ どうと うた</sup> められ 爾の名は世世に 尊み歌わる、アミン。

<sup>しゅ なんぢ たの よ なんぢ あわれみ われら た たま しゅ なんぢ あが ほ</sup> 主よ、爾を待むに因りて、爾の憐を我等に垂れ給え、主よ、爾は崇め讃めらる、

<sup>なんぢ いましめ われ おし たま しゅさい なんぢ あが ほ なんぢ いましめ われ さと</sup> 爾の誠を我に訓え給え、主宰よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に悟らせ

<sup>たま せい もの なんぢ あが ほ なんぢ いましめ われ たら たま</sup> 給え、聖なる者よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠にて我を照し給え。

<sup>しゅ なんぢ あわれみ よよ あ なんぢ て つく もの す なか ほまれ なんぢ き</sup> 主よ、爾の憐は世世に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ、讃は爾に歸し、

うた なんぢ き こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
歌は 爾に歸し、光榮は 爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

【 増聯禱 】

われらしゅ まえ わ くれ いのり ま くわ  
司祭) 我等主の前に吾が晩の禱を増し加えん、



かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



こ くれ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと  
司祭) 此の晩の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま しゅ もと  
司祭) 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと  
司祭) 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと  
司祭) 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと  
司祭) 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ  
司祭) 我等の生命の終がハリストティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハ

リストスの<sup>おそ</sup>畏る<sup>べ</sup>可き<sup>しんぱん</sup>審判<sup>おい</sup>に<sup>よろ</sup>於て<sup>こたえ</sup>宜しき<sup>たま</sup>對<sup>もと</sup>をなすを賜わんことを求む、



司祭) <sup>しせいしけつ</sup>至聖至潔にして<sup>いた</sup>至りて<sup>さんび</sup>讚美<sup>われら</sup>たる我等の<sup>こうえい</sup>光榮<sup>ぢよさい</sup>の女宰<sup>しょうしんぢよ</sup>、生神女<sup>えいていどうぢよ</sup>、永貞童女マリヤと、

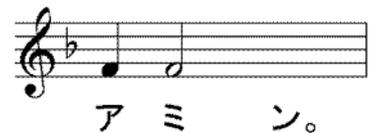
<sup>しよせいじん</sup>諸聖人<sup>きおく</sup>を記憶して、<sup>われらおのれ</sup>我等己の身<sup>みおよ</sup>及び<sup>たがい</sup>互に<sup>おのおの</sup>各の身<sup>み</sup>を以て、<sup>もつ</sup>並に<sup>ならび</sup>悉く<sup>ことごと</sup>の我等の<sup>われら</sup>

<sup>いのち</sup>生命<sup>もつ</sup>を以て、<sup>かみ</sup>ハリストス<sup>いたく</sup>神に委託せん、



司祭) <sup>けだしなんぢ</sup>蓋爾は<sup>ぜん</sup>善にして<sup>ひと</sup>人を愛する<sup>かみ</sup>神なり、<sup>われらこうえい</sup>我等光榮を<sup>なんぢちち</sup>爾父と<sup>こ</sup>子と<sup>せいしん</sup>聖神に<sup>けん</sup>獻ず、<sup>いま</sup>今も

<sup>いつ</sup>何時も<sup>よよ</sup>世に、



司祭) <sup>しゅうじん</sup>衆人<sup>へいあん</sup>に平安



司祭) <sup>われら</sup>我等の<sup>こうべ</sup>首を<sup>しゅ</sup>主に<sup>かが</sup>屈めん



司祭) (黙經) <sup>しゅわ</sup>主我が<sup>かみ</sup>神、<sup>てん</sup>天を<sup>かが</sup>屈めて<sup>じんるい</sup>人類を<sup>すく</sup>救うが<sup>ため</sup>爲に<sup>くだ</sup>降りし<sup>もの</sup>者よ、<sup>なんぢ</sup>爾の<sup>しよぼく</sup>諸僕と<sup>なんぢ</sup>爾の<sup>し</sup>嗣

<sup>ぎょう</sup>業とを<sup>かえり</sup>顧み<sup>たま</sup>給え、<sup>けだしなんぢ</sup>蓋爾の<sup>しよぼく</sup>諸僕は、<sup>なんぢおそ</sup>爾畏るべくして<sup>ひと</sup>人を愛する<sup>しんぱんしや</sup>審判者

<sup>こうべ</sup>に首を<sup>かが</sup>屈め、<sup>おのれ</sup>己の<sup>くび</sup>頸を<sup>ふ</sup>伏し、<sup>ひと</sup>人の<sup>たすけ</sup>助を<sup>ま</sup>俟たず、<sup>すなわちなんぢ</sup>乃爾の<sup>あわれみ</sup>隣を<sup>ま</sup>俟ち、<sup>なんぢ</sup>爾

<sup>すくい</sup>の救を<sup>あお</sup>仰ぐ、<sup>もと</sup>求む<sup>かれら</sup>彼等を<sup>つね</sup>恒に<sup>まも</sup>護り、<sup>かれら</sup>彼等を<sup>こ</sup>此の<sup>ゆうべ</sup>夕にも、<sup>つぎ</sup>次て<sup>いた</sup>至る<sup>よる</sup>夜にも、<sup>およそ</sup>凡

<sup>てきおよそ</sup>の敵<sup>あくま</sup>凡の<sup>かんぼう</sup>悪魔の<sup>むな</sup>姦謀と<sup>しりよ</sup>虚しき<sup>あ</sup>思慮と<sup>いねん</sup>悪しき<sup>まも</sup>意念と<sup>たま</sup>より護り給え、)

ねが なんぢちち こ せいしん くに けんべい さんようさんえい いま いつ よよ  
願わくは爾 父と子と聖神の國の權柄は讚揚讚榮せられん、今も何時も世に、



【 くづけ スティヒラ 挿句の讚詞 】

誦經) しゅ なんぢ おんちよう かがや われら たましい こうしょう かがや み よ い とき  
主よ、爾の恩寵は輝き、我等の靈の光照は輝けり。視よ、嘉く納るべき時、  
み つうかい とき われら くらやみ おこない のぞ ひかり よろい き ものいみ おおい  
視よ、痛悔の時なり、我等は昏昧の行を徐きて、光明の甲を衣ん、齋の大な  
うみ わた わ きゅうせいしゅ われら たましい すく しゅ みつかめ ふかつ  
る海を濟りて、我が救世主イイススハリストス、我等の靈を救う主の三日目の復活  
いた ため  
に至らん爲なり。

てん おもの われめ あ なんぢ のぞ み ぼく めしゅじん て のぞ ひ めしゅふ  
天に居る者よ、我目を擧げて爾を望む。視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦の  
て のぞ ごと われら め しゅわ かみ のぞ そのわれら あわれ ま  
手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を憐むを俟つ。

しゅ なんぢ おんちよう かがや われら たましい こうしょう かがや み よ い とき  
主よ、爾の恩寵は輝き、我等の靈の光照は輝けり。視よ、嘉く納るべき時、  
み つうかい とき われら くらやみ おこない のぞ ひかり よろい き ものいみ おおい  
視よ、痛悔の時なり、我等は昏昧の行を徐きて、光明の甲を衣ん、齋の大な  
うみ わた わ きゅうせいしゅ われら たましい すく しゅ みつかめ ふかつ  
る海を濟りて、我が救世主イイススハリストス、我等の靈を救う主の三日目の復活  
いた ため  
に至らん爲なり。

しゅ われら あわれ われら あわれ たま けだしわれら あなどり あた われら たましい  
主よ、我等を憐み、我等を憐み給え、蓋我等は悔に鑿き足れり。我等の靈  
おご もの はづかしめ ほこ もの あなどり あた  
は驕る者の辱と誇る者の悔とに鑿き足れり。

なんぢ しょせいじん きおく おい えい かみ かれら きとう い われら  
爾の諸聖人の記憶に於て榮せらるるハリストス神よ、彼等の祈禱を納れて、我等に  
おおい あわれみ た たま  
大なる憐を垂れ給え。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

じゅんけつ かみ はは てん ひんい なんぢ さんえい けだしなんぢ ちちおよ せいしん どうえいざい  
純潔なる神の母よ、天の品位は爾を讚榮す。蓋爾は父及び聖神と同永在  
おのれ むね もつ てんぐん む つく かみ う たま いた むてん もの なんぢ  
にして己の旨を以て天軍を無より造りし神を生み給えり。至りて無玷なる者よ、爾  
かしょう せいきょうしゃ たましい ほろび すく てら かれ いの たま  
を歌頌する正教者の靈を壞滅より救いて照さんことを彼に祈り給え。

奉神者シメオンの祝文 しゅさい いまなんぢ ことば したが なんぢ ぼく ゆる あんぜん ゆ  
主宰よ、今爾の言に循いて、爾の僕を釈し、安然として逝か



な あんちは おんなの うちに て さんびた り、  
 爾 女 中 讚 美

な あんちの はらの みも さんびた り、 なんぢは わ  
 爾 腹 果 讚 美 爾 我

れらの たましいを すくうしゅを うみたれば な  
 等 靈 救 主 生

あ り。

こう え い は ち ち と こ と せ い しん に き す、  
 光 榮 父 子 聖 神 歸

ハリストスの じゅせんしゃ よ、 われら しゅうじんを き お憶  
 授 洗 者 我 等 衆 人 記 憶

くして、 わ が ふ ほ う よ り す く わ る る を え 得  
 我 不 法 救

せ し め た ま え。 わ れ ら の た め に き と う  
 給 我 等 の 爲 祈 禱

す る の おん ちよう は なんぢに た ま わ り た れ ば な  
 恩 寵 爾 賜

あ り。

い ま も い つ も よ よ に、 ア ミ ン。  
 今 何 時 世 世

せ い し と と し よ せ い じ ん よ 、 わ れ ら の た め に  
 聖 使 徒 諸 聖 人 我 等 為  
 い の り て 、 わ れ ら に わ ざ わ い と う れ い  
 祈 我 等 禍 憂  
 よ り す く わ る る を え せ し め た ま え 。  
 救 得 給  
 なん ぢ ら は き ゆ う せ い し ゆ の ま え に わ が ね っ し ん の ち ゆ う  
 爾 等 救 世 主 前 吾 熱 心 中  
 ほ し や た れ ば な あ り 。  
 保 者  
 し ょ う し ん ぢ よ よ 、 わ れ ら なん ぢ が じ れ ん の も と に は し  
 生 神 女 我 等 爾 慈 憐 下 趨  
 り つ く 。 あ や う き と き に お 於 い て わ れ  
 附 危 時 於 我  
 ら の き と う を し り ぞ く る な か れ 。 ひ と  
 等 祈 禱 斥 勿 獨  
 り き よ く ひ と り あ が め ほ め ら る る も の  
 淨 獨 崇 讚 者  
 よ 、 わ れ ら を も ろ も ろ の わ ざ わ い よ り す く  
 我 等 諸 禍 憂  
 い た ま あ え 。  
 給

誦經) <sup>しゅあわれ</sup>主 憐 めよ、<sup>しゅあわれ</sup>主 憐 めよ、<sup>しゅあわれ</sup>主 憐 めよ、<sup>しゅあわれ</sup>主 憐 めよ、<sup>しゅあわれ</sup>主 憐 めよ、<sup>しゅあわれ</sup>主 憐 めよ、<sup>しゅあわれ</sup>主 憐  
 めよ、<sup>しゅあわれ</sup>主 憐 めよ、<sup>しゅあわれ</sup>主 憐 めよ、<sup>しゅあわれ</sup>主 憐 めよ、<sup>しゅあわれ</sup>主 憐 めよ、<sup>しゅあわれ</sup>主 憐 めよ、



いつもよよに、アミン。しゅあわれめ、しゅ  
 何時 世世 主 憐 主

あわれめ、しゅあわれめよ、ふくをくだ  
 憐 主 憐 福 降

せ。

司祭) <sup>われら まこと かみ そのしじょう はは きとう こうえい とうと てんぐん こうえい</sup>  
 ハリストス我等の眞の神は、其至淨なる母の祈禱と、光榮なる尊き天軍、光榮  
<sup>さんび せいしと せい ぎ かみ そふぼ およ およ しょせいじん</sup>  
 にして讚美たる聖使徒、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、及び諸聖人の  
<sup>きとう より われら あわれ すく かれ ぜん ひと あい しゅ</sup>  
 祈禱に因て我等を憐み救わん、彼は善にして人を愛する主なればなり、

アミン。

かみよ、わがくにのてんのおう、および  
 神 我 國 天 皇 及

くにをつかさどるもの、われらのふしゅ  
 國 司 者 我 等 府 主

きょうセラフィム、およびことごとくのせいきょう  
 教 及 悉 正 教

のハリスティアンら を、いくとせにもまもり  
 等 幾 歳 護

たまえ。

給

・一人一人赦罪しあい和睦し、偕に大齋を過ごさんとす。